

本稿は現代中国語における副詞“在”についての研究であり、以下の七つの章によって構成されている。

第一章 副詞“在”の先行研究

第二章 副詞“在”と前置詞“在”の統一的解釈

第三章 “在”構文の生成過程

第四章 [現場進行]における副詞“在”と[非現場進行]における副詞“在”

第五章 副詞“在”が表す[複数の出来事の存在]

第六章 副詞“在”の文における時制構造

第七章 副詞“在”と副詞“正”の意味と論理

まず第一章では、他の研究者は副詞“在”を如何に解釈しているのかを確認し、その記述の中から検討の余地があると思われる点を四つ提示する。

第一に、副詞“在”に対して多くの研究者が「進行」という言葉を用いて解釈していることである。

第二に、“在”は[現在]、[過去]、[未来]のいずれにおいても生起しえることである。従って、“在”は時態(aspect)を表現することが可能であると推測できる。

第三に、“在”は、“经常”、“总”、“一向”、“一直”、“还”、“又”、“已经”といった成分と共に共起することができ、これらの成分によって“在”が修飾する出来事の長期的な存在を保証していることである。

第四としては、副詞の“在”と前置詞の“在”は共に状況語となる点からして、時として両成分の境界線は曖昧となる可能性があるということである。

以上の問題点は第二章から第七章の中で妥当な見解を提示する。

そこで第二章では、副詞“在”によって構成する“在+動詞”は、前置詞“在”に後続する目的語が省略された形式であることを主張する。即ち、“在”は副詞、前置詞を問わず、いずれも述連構造の一番目の動詞を担うと見なし、かつ、“在”の後方には、意味上、必ず目的語が存在すると考える。従って“在”に後続した目的語の有する特徴の差異、或いは目的語の有無に基づき、以下の三つの構文に区分して考察を行うこととなる。

① 出来事地点が既知の情報と見なされて目的語が省略された“在”構文

② 出来事地点が特定化できずに目的語が省略された“在”構文

③ 目的語が生起した“在”構文

また、“在”の文における各成分の意味関係を明らかにするため、松村(2005)の理論を基にして、命題論理(propositional logic)と述語論理(predicate logic)を併用した論理式による解析を試みる。

第三章では、オートマトン(automaton)、状態遷移図(state transition diagram)、論理回路(logical circuit)、タイプ理論(type theory)を運用し、第二章で用いた論理式の正当性を多角的に証明する。また、終わりには談話概念から論理式の生成を検討する。

第四章は副詞の“在”が表す[進行]を[現場進行]と[非現場進行]に区分して考察を行う。要点は以下の三つである。

第一に、[現場進行]の文は、出来事が発話時間において存在している点に注目が置かれた[進行]であり、一方[非現場進行]は、発話時間に制限されず、出来事が複数存在している点に着眼した[進行]である。第二に、[現場進行]の文の出来事地点は一か所であり、[非現場進行]の文の出来事地点は複数に及ぶということである。第三の要点としては、[現場進行]の文は出来事の高発を保証する成分が生起しないが、[非現場進行]の文には出来事の高発を保証する成分(“最近”、“現在”、“每天”、“一天到晚”、“一直”、“六年”)が生起しているということである。また、第二章で運用した論理式の解析をここでも用いることにする。

第五章においては、副詞“在”が表す[進行]の概念が論理的に如何なるしくみによって成立しているのかを明らかにする。主たる考察方法は、副詞“在”が生起する文を五つのタイプに分けて分析し、“在”が示す[進行]とは厳密に[複数の出来事の存在]の意であることを証明する。重要な点は、副詞“在”に後続する動詞が有する[持続]の意味特徴、及び他の成分や前後の文脈によって、出来事が「数量化」していることである。その五つのタイプは以下の通りである。

- ① 複数の時間概念から[進行]を明確に判断できる例
- ② 複数の場所概念から[進行]を明確に判断できる例
- ③ 複数の動作主から[進行]を明確に判断できる例
- ④ 複数の動作行為の対象から[進行]を明確に判断できる例
- ⑤ 他の文脈から[進行]を明確に判断できる例

そして、第六章では、副詞“在”は[進行]の意味を表す時態成分であるという仮説のもと、“在”と時制(tense)との関わりについて詳述する。主として、絶対時間と相対時間の二つの視点から“在”構文を考察する。その結果、絶対時間から考察すると、発話時間と時態副詞“在”が生起する文(出来事時間)との時間関係は、[過去]における[進行]、[現在]における[進行]、或いは[未来]における[進行]の表現が可能であることを論じる。一方、相対時間から考察すると、参照時間と時態副詞“在”が生起する文(出来事時間)との時間関係は、[簡単]の関係を構成すると考える。また、この章においても命題論理と述語論理を併用した論理式による解析を行う。そして最後には、集合論(set theory)を運用して“在”の文の生成プロセスを検討し、時間体系から見た“在”の文の生成は、時相(phase)表現から時態表現、そして時態表現から時制表現という過程を踏むことを提示する。

第七章においては、集合論と量量子(quantifier)を運用して、副詞“在”と副詞“正”が表す意味を考察し、両成分の差異を明らかにする。その結果、“在”の[複数の出来事の存在]

の意は、通常、存在量子子(existential quantifier)によって解析し、“正”の[複数の出来事の包括]の意は全称量子子(universal quantifier)によって解しえることを主張する。